

性 感 染 症 検 査

■ 検診を指導した先生

町田利正

東京産婦人科医会会長

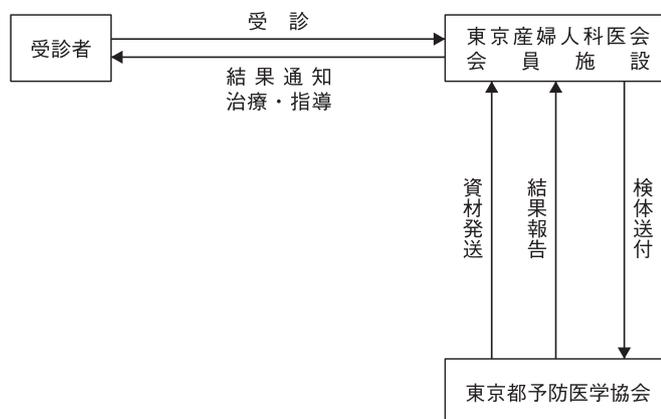
松田静治

性の健康医学財団理事長

■ 検診の方法とシステム

性感染症（STD）検査は、1987（昭和62）年度より東京産婦人科医会（以下「医会」）の協力のもと、都内産婦人科診療所、病産院にてSTDが疑われた患者を対象に実施された。検査材料の子宮頸管スワブが郵送により東京都予防医学協会に送付され、クラミジア・トラコマチスと淋菌〔1992（平成4）年より実施〕の検査が行われる。検査法は、開始当初から1991年度まではEIA法、1992年度から1998年度まではDNAプローブ法、そして1999年度からはPCR法を使用し、さらに2007年5月からはアプティマCombo2核酸増幅法（クラミジア&淋菌同時一括テスト方式）を使用している。検査結果は医会会員施設へ通知する方式で実施されている。今回より性感染症の略称を従来のSTDよりSTIに変更した。この理由として性感染症には無症状感染が多いため、STDを含むSTIとした。

性感染症検査システム



東京におけるクラミジア・トラコマチスおよび 淋菌検査の実施成績

松田 静治

性の健康医学財団理事長

はじめに

クラミジア・トラコマチス(以下クラミジア)および淋菌による性器の感染症は、性感染症(STD: sexually transmitted diseases, STI: sexually transmitted infections)の代表的な疾患で、男性は尿道炎、女性では子宮頸管炎が主な疾患である。女性には時に上行感染し、子宮付属炎(PID)を起こすこともある。両菌とも、近年性器外感染、つまり咽頭からの検出頻度が高まる傾向にある。クラミジアには現在耐性株は認められず、マクロライド系やニューキノロン薬の内服治療が行われる。しかし、淋菌は薬剤耐性の獲得が速く、治療薬剤も限定され、セフェム系の注射薬(CTRなど)の単回投与が行われる。

東京都予防医学協会(以下「本会」)では東京産婦人科医会(町田利正会長)の協力を得て、1987(昭和62)年より、東京都におけるクラミジアの抗原検査を続けており、1992(平成4)年度からは淋菌の抗原検査も実施している。

本稿では、過去22年間のクラミジアおよび過去17年間の淋菌の検査成績をまとめて報告する。

本会におけるクラミジア、淋菌の検査成績

[1] クラミジアおよび淋菌の検査法

子宮頸管より採取した材料を検体とした。検体は東京産婦人科医会の協力のもと、東京都内の産婦人科診療所、病産院から送付されたもので、本会で両菌の一括抗原検査を行った。抗原検査法は初期にはEIA法(クラミジアザイム)を、1992年4月よりDNA

プローブ(C.T.N.G)を、1999年4月からはアンプリコアPCR法を使用し、さらに2007年5月からはアプティマCombo2核酸増幅法(クラミジア&淋菌同時一括テスト方式)を使用している。

[2] 抗原検査成績

1. クラミジアの検査成績

1987年4月から2009年3月までのクラミジアの検査成績をまとめたのが表1、図1である。クラミジアの陽性率(検出率)は、総計95,027例中10.8%(10,289例)であり、年度により検査方法が異なってもクラミジア陽性率に大きな差はみられない。ところが、2007年度では7.8%、2008年度も7.2%と陽性率が低かった。年齢層別の検出状況(図2)をみると、例数は少ない14歳以下は別として、15~19歳が最も陽性率が高く、過去10年以上40歳以上に比べ高率である。これを東京都の定点観測成績と比較した場合、本会の成績ではより若年層における患者の増加がみられている。図3は年齢別によるクラミジア陽性率の年次推移である。なお、検査例のうち妊婦の陽性率は28,799例中5.6%(1,627例)である(表1)。

2. 淋菌の検査成績

1992年以降2009年3月までの淋菌検出状況は表2、図1に示すように、陽性率(検出率)は20,797例中4.6%(950例)で、クラミジア陽性率の約1/2となっている。年度別の検出状況では、近年陽性率の減少傾向がみられており、2003年6.5%、2004年は4.1%、2005年は4.2%、2006年は4.7%の陽性率であったが、2007年1.6%、2008年1.3%とさらに減少した(表2)。

年齢層別の検出状況を示したのが図4、図5で、2000年前後で15～19歳の陽性率が高い。反面、例数は少ないが、40歳以上での陽性率の上昇傾向もみられ、この年齢層の女性の淋菌罹患にも注意を払う必要がある。また妊婦では4,053例中1.2%（48例）の淋菌陽性率が得られている（表2）。

3. 混合感染

クラミジアと淋菌の両方の検査依頼における検出状況であるが、2006年度までは両菌の一括検査は混合感染が疑われる症例についての検査が主体であった。1992年から2008年までの混合感染の割合は19,887例中1.6%（321例）であった。なお2007年度から採用した検査法は、すべての検体について一括・同時検査（再検を除く）を行っている。

表1 クラミジア・トラコマチスの年度別検出状況

年 度	妊 娠 者			非妊 娠 者			記 入 無 し			合 計		
	検査数	陽性数	%	検査数	陽性数	%	検査数	陽性数	%	検査数	陽性数	%
	1987	764	47	6.2	2,099	261	12.4	906	129	14.2	3,769	437
1988	269	21	7.8	1,364	160	11.7	740	81	10.9	2,373	262	11.0
1989	527	36	6.8	987	139	14.1	669	89	13.3	2,183	264	12.1
1990	2,825	163	5.8	2,729	352	12.9	634	85	13.4	6,188	600	9.7
1991	2,479	132	5.3	3,104	390	12.6	496	55	11.1	6,079	577	9.5
1992	2,404	130	5.4	3,928	516	13.1	913	122	13.4	7,245	768	10.6
1993	1,662	100	6.0	3,785	431	11.4	575	64	11.1	6,022	595	9.9
1994	1,187	93	7.8	3,067	381	12.4	537	68	12.7	4,791	542	11.3
1995	1,035	58	5.6	2,750	300	10.9	543	43	7.9	4,328	401	9.3
1996	982	70	7.1	2,668	329	12.3	441	50	11.3	4,091	449	11.0
1997	1,331	75	5.6	2,604	336	12.9	292	41	14.0	4,227	452	10.7
1998	1,896	86	4.5	2,960	370	12.5	322	41	12.7	5,178	497	9.6
1999	1,941	120	6.2	3,690	600	16.3	347	49	14.1	5,978	769	12.9
2000	1,629	92	5.7	3,641	582	16.0	345	52	15.1	5,615	726	12.9
2001	998	72	7.2	3,213	493	15.3	195	27	13.8	4,406	592	13.4
2002	972	70	7.2	3,193	489	15.3	154	16	10.4	4,319	575	13.3
2003	912	64	7.0	2,784	377	13.5	140	16	11.4	3,836	457	11.9
2004	969	51	5.3	2,240	288	12.9	281	35	12.5	3,490	374	10.7
2005	716	34	4.8	1,743	192	11.0	360	53	14.7	2,819	279	9.9
2006	583	28	4.8	1,417	164	11.6	287	45	15.7	2,287	237	10.4
2007	1,367	35	2.6	1,346	146	10.9	371	60	16.2	3,084	241	7.8
2008	1,351	50	3.7	1,042	107	10.3	326	38	11.7	2,719	195	7.2
合 計	28,799	1,627	5.6	56,354	7,403	13.1	9,874	1,259	12.8	95,027	10,289	10.8

(注) 集計された検査数は、全て女性の初検者のみである。再検査者については集計対象から除外してある。

図1 クラミジア・トラコマチス陽性率と淋菌陽性率の年次推移

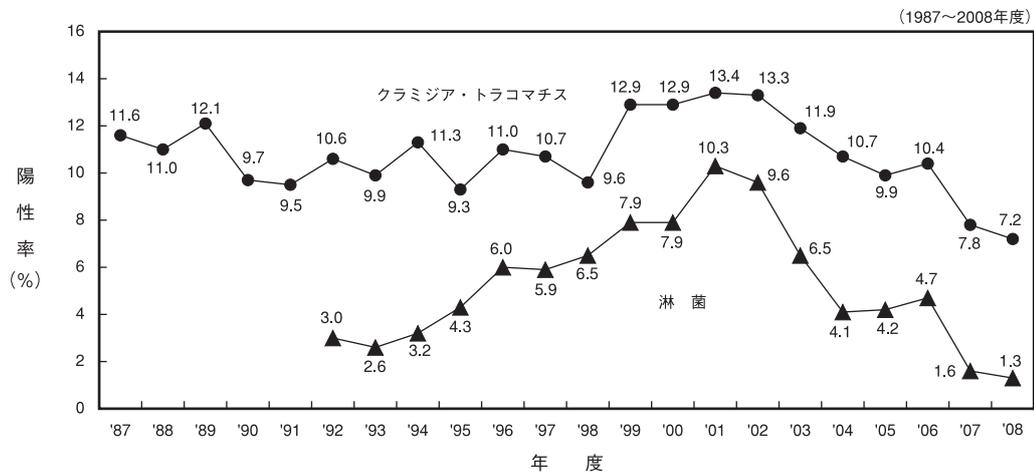


表2 淋菌の年度別検出状況

年 度	(1992～2008年度)											
	妊 娠 者			非妊 娠 者			記 入 無 し			合 計		
	検査数	陽性数	%	検査数	陽性数	%	検査数	陽性数	%	検査数	陽性数	%
1992	434	8	1.8	1,224	39	3.2	264	10	3.8	1,922	57	3.0
1993	176	3	1.7	833	26	3.1	177	2	1.1	1,186	31	2.6
1994	100	3	3.0	636	19	3.0	148	6	4.1	884	28	3.2
1995	61	2	3.3	560	28	5.0	97	1	1.0	718	31	4.3
1996	54	4	7.4	548	36	6.6	76	1	1.3	678	41	6.0
1997	28	2	7.1	485	31	6.4	63	1	1.6	576	34	5.9
1998	30	2	6.5	572	34	5.9	79	8	10.1	681	44	6.5
1999	52	6	11.5	911	72	7.9	119	8	6.7	1,082	86	7.9
2000	59	1	1.7	961	78	8.1	170	15	8.8	1,190	94	7.9
2001	47	8	17.0	974	99	10.2	51	3	5.9	1,072	110	10.3
2002	42	4	9.5	1,056	100	9.5	53	6	11.3	1,151	110	9.6
2003	118	0	0.0	1,104	80	7.3	57	3	5.3	1,279	83	6.5
2004	182	0	0.0	945	45	4.8	156	8	5.1	1,283	53	4.1
2005	36	2	5.6	668	21	3.1	131	12	9.2	835	35	4.2
2006	20	0	0.0	513	17	3.3	131	14	10.7	664	31	4.7
2007	1,268	1	0.8	1,273	29	2.3	350	16	4.6	2,891	46	1.6
2008	1,346	2	0.1	1,038	21	2.0	321	13	4.1	2,705	36	1.3
合 計	4,053	48	1.2	14,301	775	5.4	2,443	127	5.2	20,797	950	4.6

(注) 集計された検査数は、全て女性の初検者のみである。再検査者については集計対象から除外してある。

図2 年齢別にみたクラミジア・トラコマチス検出率の年度群別推移

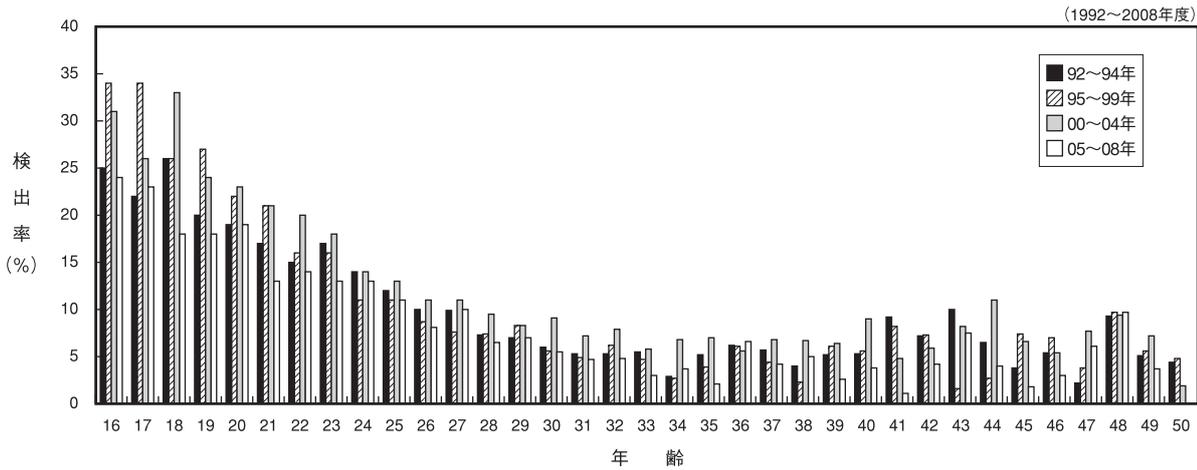


図3 クラミジア・トラコマチスの年齢層別検出率の年次推移

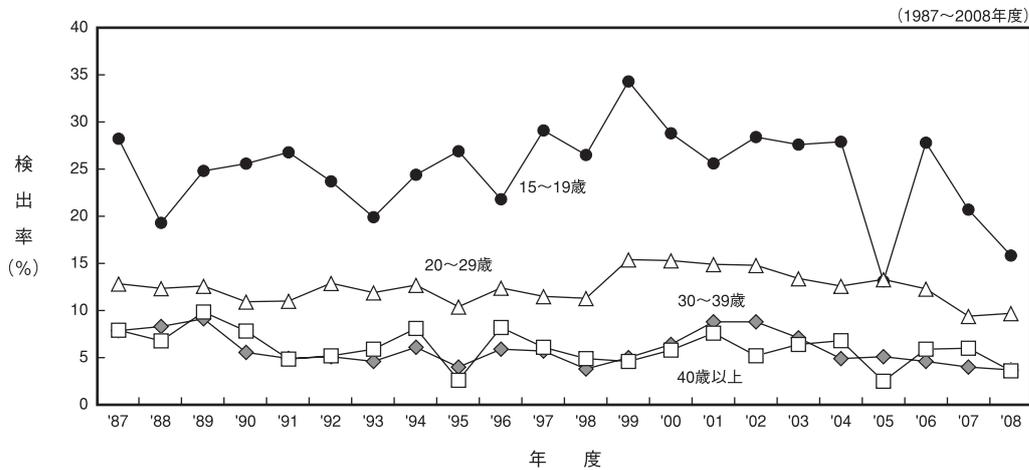


図4 年齢別にみた淋菌検出率の年度群別推移

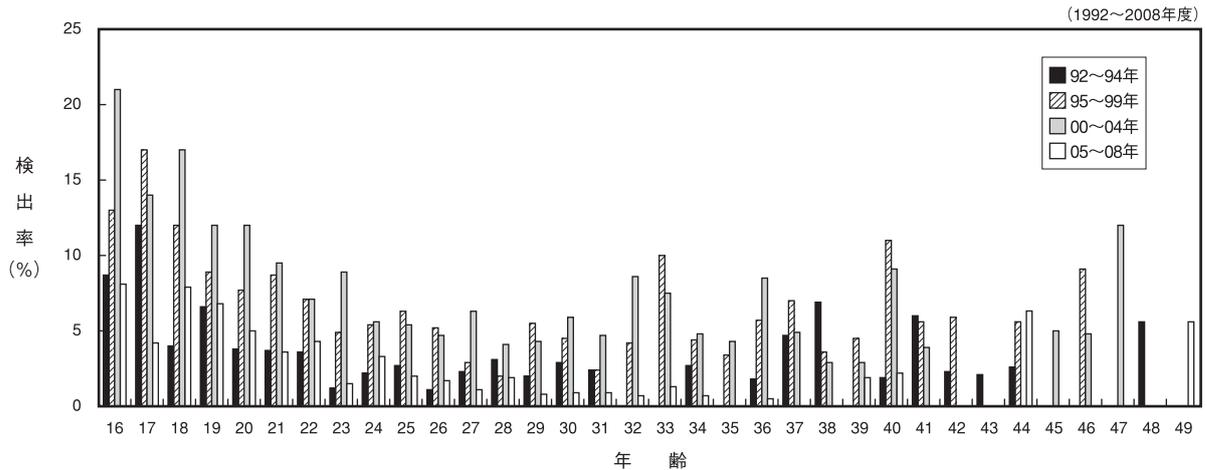
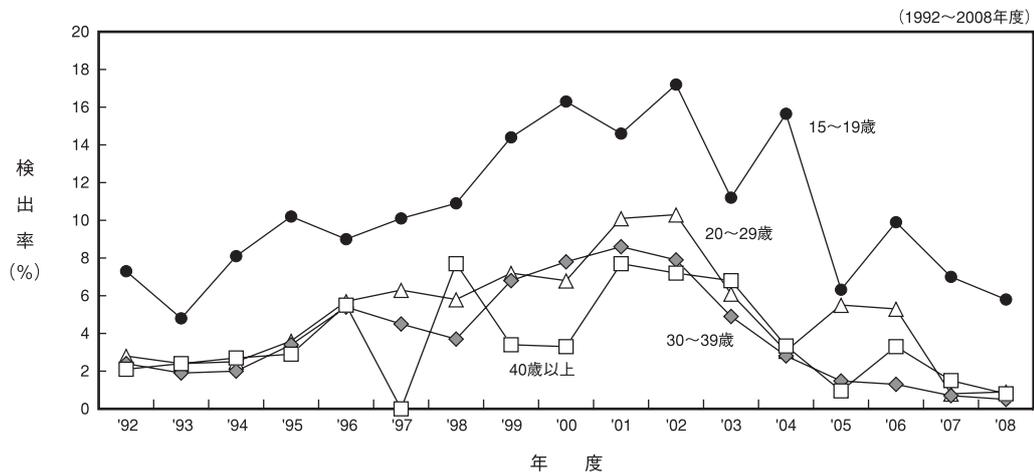


図5 淋菌の年齢層別検出率の年次推移



おわりに

以上本会の東京地区におけるクラミジア、淋菌の検査成績について述べた。

STDのうちクラミジア、淋菌の感染症は近年減少傾向の兆しがあるが、現在医療機関にかかっていない隠れた感染者も数多いことを踏まえ、個人個人の自己管理と性教育の徹底といった予防対策は極めて重要である。このためには、STD検査、たとえばクラミジアや淋菌検査のより一層の普及が望ましい。

参考文献

- 1) 岡部信彦, 多田有希: 発生動向調査からみた性感染症の最近の動向, 日本感染症学会誌, 19 (1) (suppl), 114~119, 2008
- 2) 松田静治: 最近のSTDの動向について, 日本医師会雑誌, 131: 1545~1550, 2004
- 3) 松田静治: 性感染症の最近の動向, 臨婦産, 63, 110~115, 2009
- 4) 松田静治: 産婦人科領域のSTD性感染症/HIV感染 (熊本悦明, 松田静治, 川名尚編), 78~87メディアカルビュー社東京2001
- 5) CDC: sexually transmitted diseases, Guidelines, 2006, MMWR, NoRR - 11, 2006
- 6) 感染症発生動向調査事業報告書 平成20年(2008年), 東京都福祉保健局